

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

No. 5 1996.12



詩と山の遍歴

第16回世界詩人会議日本大会'96前橋協賛
第31回前橋文学館アート・ステージより

秋谷 豊

平成8年7月20日、当館3階ホールで、第16回世界詩人会議日本大会'96前橋の開催委員長として活躍の、詩人で登山家・秋谷豊さんを講師に「詩と山の遍歴 戦後51年いかに詩を書いてきたか」と題した講演が行われました。以下はその抜粋です。

どうも皆さん、今日は。前橋は私にとっても大変かかわりの深い、また個人的にも思い出の深い街なのです。

萩原朝太郎が元気に活躍されていたころに、朝太郎と実際に会つたり、遠くから見かけたりした方々はもうほとんどいないのではないかと気がします。郷土出身の詩人で言えば、伊藤信吉さんとか、もはやごく少数の人になつてしまいました。実は私自身も学生時代に朝太郎に二度会つたことがあるのです。

朔太郎との出会い

もちろん、会つたと言うと大変おこがましいので、遠くから見かけたと言うのが正確だと思うのですが、昭和十三年のころですが、「四季」という雑誌が発刊されました。これは日本の昭和の抒情派を形成した大きな詩のグループなのですけれども、この「四季」の会が、東京銀座の川向こうと呼ばれていた中華料理店で開かれていたわけです。私は名もない文学青年ですから、一会員として片隅に出席したわけです。その会にたまたま萩原朝太郎が見えていたわけです。

昭和十三年というのは、日本と中国との間の戦争がまだ



●あきや ゆたか（詩人・登山家）
1922(大11)年、埼玉県鴻巣市生まれ。日本大学予科に学び、1930年代、堀辰雄、三好達治、丸山薫らの「四季」の影響で詩を始める。また、登山家としてヒマラヤ、アラスカなど多くの海外遠征に参加する。日本現代詩人会会長。第16回世界詩人会議日本大会'96前橋の開催委員長を務める。主な著書に詩集『砂漠のミイラ』（第21回日本詩人クラブ賞）『時代の明け方』（第2回丸山薫賞）などのほか評論、エッセイなどがある。

大陸に拡大されていった時期だったので、首都南京を日本軍が攻略して、それを称える詩を朔太郎が新聞に発表したわけです。そのことを、ある若い詩人が朔太郎に向かって非常に鋭く問いかける場面があつたのですけれども、その時は朔太郎は沈んだような顔でじつと沈黙し何も答えなかつたですね。

当時、朔太郎は「日本への回帰」という評論を書き続けていて、一つの思想的転機に遭遇していたと思います。しかし、南京陥落の詩は、僕はやはり日本の戦争詩の傑作の一つであると思つています。

事実、朝太郎の詩の全集が出された時に、ちゃんとその詩は入っています。多くの詩人たちは戦争中に書いた詩を自分の全集から外すというのが大多数だったのですが、その中で朝太郎の南京陥落の詩は毅然として全集の一ページを占めていることに、私はいま感動を覚えているわけです。

その時に何も答えなかった朝太郎の気持ちというものを、私は、この一九九六年のこの場所で深く思い返しております。

朝太郎はどういう詩人であったのか。私の感じて言いますと、人間とか自然、風景とか、そういう様々のものを自由自在のイメージでうたい上げた。その詩は自由な詩精神の発露と言えるでしょう。朝太郎は文語と口語の両方の詩を書いていきます。つまり日本語を見事に駆使して、その極限をその自在のイメージで表現された。そのように私は思っています。

しかし、彼の詩精神の原型は、近代の寂寞を常にさまよう存在にあるのではないかと、私は思います。朝太郎についていろいろな見方があつていいと思います。例えば、孤独な美学の持ち主である。それも一つ当たつていると思います。やはり孤独な美学ということは、言い換えれば人間の本源を問うことであると私は思いますので、彼がそうした中で現代を生きながら、あるいは傷つきながらも、常に自己省察のうえに立っていた詩人ではないか。そのように私は理解していません。

「いま遠く郷土を望景すれば、萬感胸に迫つてくる」と、彼は大正十四年に発行された詩集、「純情小曲集」の中の序で書いています。前橋を、彼は荒涼とした関東平野のまつただ中の古時計の錆びた機械のようなひっそりとした街であると言っています。

これは恐らく朝太郎が青年時代を送った大正時代の前橋で

あろうと思いますが、確かに荒廃した街であつたかもしれないが、当時の前橋というのは、繭、生糸の集散、農産物の取り引きの集散地の中心であつたわけですから、ずいぶん栄えた街であつたと、私は覚えているわけです。

朝太郎は、それを決して錆びた古時計と言わなかったところがいいのでしようね。それを錆びた機械のようにと言うのです。ものすごく事物的に表現したところが、朝太郎らしいものを見つめる、むしろ透視する目を持ったと言うべきでしょう。やはり朝太郎は一つの事物や風景とか、自分の体験を見通すような心を持った詩人ではないかと考えています。(中略)

私が最初に読んだのは、萩原朝太郎だつたでしょうね。実際に多く惹かれるのは別の詩人なのですが、私は朝太郎を知ることによつて、それをさらにさかのぼつて、例えば森鷗外や島崎藤村の時代に入つていったような気がします。もう一人、その傍らには北村透谷がいるわけですが、ですから私は日本の近代詩という一つの存在から言えば、朝太郎を一番最初に自覚したわけです。しかし、それからさかのぼつて日本の近代詩の源を、過去をつきぬけてもう一度たぐろうという気持ちになつたのです。その過程には朝太郎よりやや若い堀辰雄などの詩人たちがいて、その青春のういういしい精神の核にふれ、だんだん詩の世界にのめり込んでいくことになるわけです。

ですから、朝太郎に惹かれたのは、反時代的であると同時に、明るさに欠けた孤独な虚無感。常に時代に反抗していた詩人、しかしそれがなぜ南京陥落の詩を書いたのかは、極めて重要ではないかと思うのです。そういうことを、これから朝太郎を研究される方はもう一度たどつていただきたい。それは大きな歴史の中で朝太郎を考えるうえで重要だと思つて

ですね。彼の晩年の「日本への回帰」に、どこかでつながっていきようなものを感じるわけです。(中略)

山登りと詩作

私たちは山に行っても、今は徳本峠を越えて上高地に入ると話を聞いたことはありません。バスや車で行ってしまおうのですが、徳本峠越えの穂高への道は、近代登山の夜明けであったのです。その時代の中で未踏の領域への一つの志向が私たちに詩を書かせたり、山登りをさせる大きな要素になっていたのではないかと思うのです。戦争の暗い谷間の中で私は暇をみてはザツクの底に握りめしを入れたりして山へ行っていました。そういう中で山に登ったり、詩を書いたりしていたことが、実は誰も知らない世界に入って行く、高みを目指す一つの行為であったということです。

山登りは一步一步自分の足で登らなないと行けないところですから、それは詩にも通じるわけです。詩というのは一字の勝負ですから、言葉は一字・一行、あるいは一編の詩全体かもわからないけれども、自分で一つ一つ刻んでいく……。では山登りは何かと言われると、自分の足で一步一步登っていくものになるわけです。

戦争の精神の荒廃の中で、山に登ることによって



自分たちが生きている証しをどこかで求めようとしていたのかもかもしれません。

そして昭和二十年八月十五日。敗戦の廃墟(はてし)の中で生きて詩を書くことが、私たちのすべての課題となりました。私自身は戦後のいろいろな詩の活動に参加することになるのですが、昭和二十年の十月に谷川岳の一ノ倉沢に行っているのです。兵隊靴をはいて、雑糞(ぞうふん)をぶら下げて、そこである一人の青年に出会うわけです。彼も山が好きで、戦争が終わったのでやってきました。彼は私より二、三歳若かったのだけれど、勤労動員で中島飛行機の工場に徴用されていたのですが、その間も暇を見ては山登りをやっていたらしいのですが、安川茂雄さんという人です。彼と知り合うことで、われわれは戦後登山を開始することとなります。

井上靖「氷壁」について

後に井上靖さんが、小説「氷壁」を書くきっかけをつくったのが安川でした。岩登りのときナイロンザイルが切断する。そして実際にナイロンザイルが切れるかどうか、世間の大きな話題になるわけです。当時はマニラ麻を使っていた、それを口ツククライミングのザイルに使ったわけですが、戦後になって新しい製法でナイロンで出来たザイルが出来たのです。

それが穂高で切れてしまうわけです。そういうことが現実起きて、それをわれわれがかかわっていた岩稜会という山岳会が事件を引き起こすわけです。安川茂雄は当時、出版社の編集長をやっていたので、たまたま井上靖さんはこちらから本を出していたわけです。そして安川が井上さんにご覧にいられたその山岳会の報告書にも、ごく興味を持ったのです。

井上さんは山登りはやっていなかったのです。金沢の第四高等学校の時は柔道部に入っていました。ある日、山岳部の部屋にいくと「命を賭ける」という言葉が壁のほり紙に書いてあって、井上さんはそれを読んでものすごく感動する。柔道は命を賭けるとは言わない。山登りはなるほど、命を賭けて登るものかと感心するわけです。そのことは井上さん自身も書いておられたと思うのですが、井上さんが初めて山岳小説らしきものを書くのが、朝日新聞に連載した「氷壁」なのですね。

それはナイロンザイル事件をテーマにして、そこは小説ですから、ある山登りの青年と人妻との、今で言う不倫が起きるのです。それにはもう一人のライバルがいて、その夫人との恋愛から彼は仲間のザイルをナイフで切り落としましたという設定なのです。

いかにも井上さんらしい、いや、らしからぬ設定の、井上さんの山岳小説になるわけです。

その時、資料を提供したのが、私が初めて谷川岳の一ノ倉沢で知り合った安川茂雄であり、彼は後に日本を代表するような登山家になるわけです。

私も駄目な山男だけど、われわれの仲間がどんどん海外遠征をする時代になって、何となくそういう仲間を引きずられて海外に行くようになって、少しは山岳界で名前を知られるようになるわけですが、そういう中で井上さんの「氷壁」が成立したわけです。

井上さんについてのお話はたくさんあるのですが、今日は私が戦後五十一年、いかに書き、いかに生きたかということが主題であります。かわりをもった作家・詩人たちに、自分の詩を書くうえでビジョンを与えられたことは間違いな

いような気がしませんね。それは、同時代の仲間たち全体の問題なのですが、そういう戦後五十一年の歴史の中で私どもはやって来たような気がいたします。

戦後詩という言い方、これは、詩は普通、現代詩と言われているんですが、では近代詩と現代詩はどう違うのかと言われると、大変困るのです。

近代というのは、一つの歴史全体を構成する時代だと思うのです。古代もあるし、中世もあるし、近世もあるわけですが、その中で現代詩というのは、今生きている人間が、今日のいろいろな生き方や問題を主題にして書いている、あるいは思想内容と言うか、それを現代の言葉で書いている詩は現代詩と言っているのではないかと思います。

現代詩というものを、我々にとつての時代というものを戦後五十一年の中で考える場合に、死の予感というのか、井上靖さんも死というものを主題にしない文学は信用できないということも言ったことがあるのです。それは極論かも知れないけれども、つまりわれわれの行き着くところはそこにあるわけだから、そのことを現在生きている人も、今生きていることが、つまり死であるという、そういう予想というのか、それは朔太郎にもそのことが言えるような気がするのです。

われわれは戦争の中でも、そういう戦争の絶望的な現実の中でも、必死に生きようとした意味が、我々の戦後文学、つまり現代詩の意味になってくるのではないかという気がするわけです。(中略)

先ほど井上さんの「氷壁」の話をしました。ナイロンザイル事件というのは、ヒマラヤでもそういう事件が起きたので

これは私たちが行ったカラコルムの山城で起きたのですが、途中でザイルが切れて自分のパートナーの仲間が墜ちてしまふ。それを支え切れなくなった場合に自分も同時に落下してしまうのです。だからザイルを切つて相手は死んでしまふが自分は助かる。大変卑劣なのですが、自らの命を守るためには最後の決断ということでしょうか。

それを大きなモチーフにして「氷壁」は書かれたわけです。それはヒマラヤでもちよくちよく起きています。

今日は私の出会った作家や詩人たちにことをお話ししようと思つて来たのですが、例えば井上さんは晩年に「星闌干」という詩集をお出しになる。これは最後の詩集になります。

井上さんは詩でものすごく硬い言葉、漢語を使うのです。これが、また井上さんの詩の魅力にもなっているのですけれども。井上さんは詩人として見ればアウトサイダーだったと思ふのです。決して詩の主流にいた方ではないけれども、しかし彼の詩の本質はなかなか尋常なものではなくて、彼が「星闌干」に書いている詩、「昭和も遠く」などはすごいです。最後に戎衣の乱れを直し、己が死も、死の意味も、人間の歴史の流れの上に必要なのだと、自分に言いきかせ、自分を納得させ、そしてその上で、最後に己が面を、静かに天に向け、そして祖国に向けた若者たちは居たのである。私の友のK、S、T、F、

みな、そのようにして、その短い生涯を閉じている。

昭和十年代、井上さんは大陸の戦線へ従軍されますが、ほとんどの仲間は死んでいるわけです。そういう仲間への鎮魂、それが昭和への決別であるという。これは絶唱ですね。私の好きな詩の一つです。

私は、井上さんとは家に行つたりするつき合ひではなかつ

たのです。山の会で時々お会いしたりすることくらいですが、「歳月」という詩があります。「星闌干」に入っている詩で、井上さんの死生観がよく表わされている詩です。現在ここに あることの一つの叙述、井上さんの詩はどちらかと言えば、自分の志を書く。まさに詩は志なのです。

あるものは叙述の原型であります。言い換えれば叙事詩の原型と言つていい。必ずストーリーがあつて、物語があつて、この「歳月」という詩も物語、

カトマンズの消印のある絵葉書が、東京の私のところに届いた。

——こんどのエベレスト登攀に於て、シエルバのビンジョの世話になりましたが、彼は十数年前、少年の頃、貴方と一緒にルクラからタンポチエの僧院まで、往復一週間、ドウトコシの溪谷沿いに歩いた、と言っていました。……

私のヒマラヤトレッキングは十七年前のこと。……そのビンジョは今どうしているかという。

これは私とも多少のかかわりがあるので話しますと、「氷壁」以後に「星と祭」という新聞小説を朝日新聞に書くわけですが、その取材でヒマラヤに行くわけです。井上さんは約一週間かかって約四千メートルのタンポチエの僧院まで、ここに書かれたとおりに歩かれたのです。その時のポーターに中学生の少年がいた。それから私は半年遅れてエベレスト登山のために、井上さんがたどったエベレスト街道と同じコースをキヤラバンした。

この詩にはフィクションがあるわけです。「カトマンズの消印のある絵葉書が東京の私のところに届いた。」しかし、「シエルバのビンジョ」というのは、実際には井上さんには付い



タンポチエの僧院と秋谷氏

ていなかっただけです。ピンジョというのには有名なエベレストに登るシエルバなのですから、しかしその頃はエベレストに登れる力はないのですけど、この井上さんの詩はややフィクションがあるわけです。

そのフィクションを書くということは、小説と詩の大きな問題であると思うのですが、この中で一番面白いのは、十数年前に井上さんの後に付いたポーターの少年が、今はヒマラヤの一流の山案内人になったということですね。これは事実と違うのではないかと私は思うのです。

しかし、それを詩に書いた場合にはフィクションがあってもいいわけです。事実そのものを、詩の場合書く必要はないわけです。これはなかなか難しいところだと思います。そういうことを、私がある雑誌に書いたことがあるのです。これとは違う出来事ですが、だから、一人の作家にとっての秘め

ておくべき部分はあるわけでしょうね。今のいろいろな文学を研究されている方が、そういう秘めておきたい部分まであばき出して書かれることは、その人が生きている間には大変苦痛になるのかなと感じたことがあります。

世界詩人会議の意義

そういうシエルバの少年たちと、私もも十日も十五日も一緒に山行の旅をする。一日山を下りてきて、翌日はまた同じところを登って行く。いったん山を下りると、その分だけまた登る。それがつまりヒマラヤのエベレスト街道だと思えます。

その中でシエルバの少年たちがいろいろな歌を歌いながら行く。「辛いねああ辛いね昼は辛いねああ辛いかんかん照りでさ」という歌で、それはチベットの民族の民謡です。そんな歌を歌いながら少年たちと私も歩く。これは文明の中心のから飛び出して最も原始的な世界に入って行くわけです。未だにまだ多くはローソクを灯したり、菜種油の芯を灯して暮らしているのです。

しかし、本当の文明というのは、こうした暗闇の中にあるということ、だんだん気づかされるわけです。だから、文明というのは必ずしも電気洗濯機があつたり、冷蔵庫があつたり、クーラーがあつたりするのが文明ではなくて、もつと違う生き方そのものが文明の中心だということを感じさせます。

想像を絶するような世界にわれわれは入って行くわけですが、そういう中で何百年の間、空気もろくにない所で人が生きているわけです。だいたい森林限界は、普通には三千メートル、日本の場合には二千五百、二千六百が限界です。それ

からは小さな植物の世界になるわけです。ヒマラヤでは五千メートルの高地まで人が暮らしています。小さいジャガイモやヒエを食べながら、暮らしている。

モンスーンの前は、エベレストに登るため、五千メートルの最奥の集落にたどり着きました。氷河の向こうの方から髯もじやの山男が歩いて来た。それが植村直巳さんでした。植村さんはアラスカのマツキンレーで遭難死してしまいましたが、未だに遺体は出てこない。こういうことは山ではごく当たり前のことでしょう。

山男は生きていたのでは山男でないから、本当は私なんかは山男ではないのです。格好はしているけど、決して山男ではない。現に生きていますから。本当の山男は死の世界に入っていくわけですから、死んで当たり前でしょうね。そういうことが今はなかなかできない。

小西政継という、凍傷で足の指の八本を失っても、まだチヨモランマに登頂している男もいます。この人は「地球」の詩祭の時にやって来て、彼が撮影した「黒い氷河」というカラコルムの登頂の時の記録映画を上映した。氷河の水は真っ黒なのです。それがものすごくショックでした。

私たちはいま、現代という巨大な文明機構がもたらす、非常に不安な生活を強いられているわけです。その中で、どこかの民族は自分の国の歌を信じて、言葉や信じて詩を書いていくわけですから、世界の見知らぬ民族のだけれど詩を書いていて、その人たちが日本へ呼んで、世界詩人会議をやらうではないかというのが、今回の詩人会議だと思います。(中略) 私は、ヒマラヤ、カラコルム、アラスカ、天山山脈、シルクロード、その他ずいぶんたくさん遠征したのですが、長い間憧れてきた大山脈を全部踏破は出来ないけれど、やっと大

山脈のどこかに取
りつくのに五十年
かかったわけです。
これも私にとつて
の戦後である。

私自身は私生活は詩に書かないのですが、歴史や時代や自然を見つめて書くことが多いのです。それが私にとつての詩の世界であるかもしれないが、実はそういう生活をきちんと見つめられる人は本当の詩人でしょうね。やはり自分の生活をちゃんと見つめられなければ、詩は書けないと、私は思います。現在でもヒマラヤのランプの生活も、またシルクロードもそうですが、そういう闇の中で、今われわれは明るい文明生活の中で生きているけれども、実は暗闇であるということを考へることも、それは決してセンチメンタルに、深刻に思うのではなくて、生きる事実として、現代の暗闇というものを考へてもよいのではないか。そのことは私が今言ったような世界の辺境と言われる地域へ入って行ったことの一つの教訓です。自らを戒めることによつて、私はこれからは詩を書くことを、ここで自らに言い聞かせてみたいと思います。(おわり)



世界詩人会議にて